

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1/4)

研究題目	アウトリーチ活動におけるインターアクティブ・パフォーマンスの研究と演奏実践	報告書作成者	大類 朋美
研究従事者	大類 朋美		
研究目的	<p>音楽におけるアウトリーチは、一般的には音楽に触れる機会が少ない人々が集まる公共の場へ、音楽家の方が出向いて、プロの生演奏を身近で聴いてもらう活動である。音楽と共に生きることを地域に広めることは、社会全体の生活の質の向上にもつながる可能性がある。何故なら、音楽を含めた芸術は生きる力や向上心に触れ、生きる証になったり、人間としての根源的な価値観形成を可能にするものだと考えるからである。</p> <p>クラシック音楽は難しいとか敷居が高いと思われがちだが、受け手側の求めているものと、送り手側の意識のずれを理解し、現状を踏まえた上で、聴衆と音楽家が持続的にアートの普及活動に参画していくことが重要だと考える。そして、送り手と受け手が、共同で芸術の社会的価値を作り出すには、どうしたらよいかという部分に焦点を当て、質の高い芸術をより身近なものと感じることのできるような演奏会やアウトリーチをいかに継続してつづけていけるかを、現状の大きな課題としている。</p> <p>アウトリーチは本来、音楽家が日々築き上げている芸術的価値の高いものを、享受者に提供するものである。しかし、我が国ではアウトリーチの概念自体は普及したものの、活動自体はまだ発展途上の段階であり、まだ多くの課題が存在する。具体的には、音楽家が伝えたい音楽のコアの部分を伝達するにあたって、慣習に捕われない多様な手法を駆使したプログラムがまだ少ないことや、単発的で継続性に欠ける活動が多く、長期間におけるプログラムの発展的展開が難しいこと等が挙げられる。</p> <p>私たち音楽家は、音楽を総合的に捉える力を養い、人と関わり合う伝達能力と、臨機応変に色々な状況に併せられる企画能力を身につけていくことが求められていると感じている。何故かというと、聴衆を開拓することは音楽家の大切な仕事の一つだと考えるからである。</p> <p>そこで、ティーチングアーティスト(芸術的な教育を施すことを、職能の大切な部分だと位置づけているアーティスト)の職能をより高めていくことによって、アウトリーチの課題の多くは、克服していくことが可能だと考える。</p> <p>本研究では、音楽の奥深さを「専門知識・技術」を用いて、紐解く作業を、音楽家の重要な社会的職能であると考え、送り手と受け手双方にとって、メリットがある関係を成立させ、双方にとって発展可能な環境を構築していくことを、ティーチングアーティストの新たな役割と位置づけ、今年度は、川崎市内の小学校7校を対象として、総数25回の体験型音楽教育プログラムを、実施した。こうした演奏実践を通して、音楽本来の力を発揮し、受け手の生きる力や向上心に触れることを研究の目的とした。</p>		

<p>研究内容</p>	<p><u>授業形態</u></p> <p>アウトリーチ希望小学校の教員との話し合いを重ね、授業やカリキュラム内容と関連付けると共に、音楽家の力が充分発揮できるような曲目やプログラムを構築した。本年度の活動のほとんどのケースは、単発的な出前演奏会ではなく、2回ずつの連続した授業を実施した。この形式を採用することにより、楽器紹介に留まらず、より音楽の中身へと迫る授業内容へと発展させることができるようになった。</p> <p>またプリントやワークシートを活用することによって、演奏家が実際に小学校にいない時間も利用できた。例えば、楽器紹介のプリントを、事前に配っておいてもらったり、1回目と2回目の授業の間には、1回目の授業後に子どもたちからの質問や感想をに演奏者が2回目の訪問の前に、目を通し、質問に答え、返信した。こうしたワークシートの活用によって、個々の子どもがどんなことを感じ、どのように授業を受け止めたかを知ることができた。子どもたちにとっても、質問を演奏家に直接聞くことができ、自分たちの考えや感じたことを表現する手段となった。</p> <p>このようにある期間、一つの音楽課題に取り組み、連動した活動を行なうことによって(短期的なレジデンシーという位置づけることによって)、教師と子どもたちと、より細やかな双方向的コミュニケーションが可能となった。</p> <p><u>体験型・参加型授業</u></p> <p>現場の小学校の先生は、なるべく多くの子どもたちに、実際の体験を通した学びを提供することを重視する。実体験に基づいた多角的な理解力を養ったり、課題解決能力を養ったり、新しいことを発案する創作能力を培うことは、長期的な教育目標である。</p> <p>音楽芸術の教育においても、音楽家が聴衆と双方向的に関わり合い(インターアクト)、影響し合いながら、文化的素養を高めていくことに、焦点をあてるプログラムが必要だと考え、体験型のコンサート(インターアクティブ・パフォーマンス“interactive performance”)の実践を試みた。これは、演奏者が聴衆の音楽的な感性に働きかけ、聴く側の想像力、思考力、聴く力を引き出していく手法を交えたパフォーマンスのことで、その手法には決まった方法があるのではなく、夫々の演奏者の技量が問われる部分である。音楽家が音楽を掘り下げていく中で、適切な方法を考案していかなければならない。実際には、演奏する曲の何がすごいのか、聴いている人にどんなことを感じ取ってもらいたいか、面白いことはどんなことか、曲に関連するお話や歴史的に興味深いエピソードがあるか等を考えることになる。そのために、資料収集をしたり授業で使う備品をつくったりして、送り手に伝えやすくするためのあらゆる手段が考えられる。</p> <p>実際現場でどのような実践演奏をしたかについての具体的な例として、平成23年度の活動報告書(「音楽によるアウトリーチ活動-インターアクティブ・パフォーマンス[体験型芸術教育]による取り組み」)に記載した。</p>
-------------	---

<p>研究のポイント</p>	<p>川崎市内の小学校7校を対象として、総数25回の体験型音楽教育プログラムを、共演者であるティーチングアーティストの方々と共に、送り届けた。複数回の連続した授業を行なうことにより(短期的なレジデンスという位置づけ)、楽器紹介に留まらずより音楽の中身へと内容を発展させた。音楽家が聴衆と双方向的に関わり合い(インターアクト)、影響し合いながら、文化的素養を高めていくことに焦点をあてる体験型のコンサート(インターアクティブ・パフォーマンス)の手法を考案し、演奏実践した。</p>
<p>研究結果</p>	<p>活動を開始して8年間に川崎市全7区の小学校で行なってきた。始めはそれぞれの場所による地域性から教育内容に差異が必要かと思われたのだが、実際には地域別の違いは感じられず、子どもたちの創造性や感受性に境界線はないことを実感した。</p> <p>音楽を聴く喜びを共感する心を育成し、音楽文化を生涯の友として、豊かな人生を送るきっかけとなって欲しいという願いから、子どもたちとプロの演奏者が近距離に身をおき、ティーチングアーティストによる双方向的なコミュニケーションやインターアクションを取り入れたアウトリーチプログラムをつくってきた。こうした活動を単発的なボランティアイベントとして終わらせるのではなく、パブリック・エデュケーション(公益的教育活動)として、そして芸術による社会的価値を創る活動として、これからも持続的に、且つ発展的に展開していく必要を感じた。</p> <p>活動を持続的に実施する環境を整えていくこと、ティーチングアーティストの技能を高め、よりよいアウトリーチを開発していくことにより、ハードとソフトの両面を充実させ、音楽の力を充分発揮できるようにすることが、今後の目標となる。そのためには日々の技術力の向上と同時に、先導的な事例(例えば、米国のニューヨーク・フィルハーモニーの教育プログラムや、ジュリアード音楽院やマンハッタン音楽院のアートインエデュケーション「芸術教育」のティーチングアーティスト養成プログラム)を研究したり、他分野におけるアウトリーチを参考にすることも重要と考えられる。</p> <p>今年度の成果を踏まえ、子ども達からの質問や感想文、アンケート、小学校教師からの評価、プログラムを実践した演奏家間の省察を基に、活動内容の効用性を検討し、次年度の活動に反映させていく。</p> <p>今年度までは、小学校が主たるアウトリーチ先だったが、ティーチングアーティストの活動領域を広げ、中学生や高校生・シニア世代を対象とする可能性も探っていきたい。</p> <p>音楽は、人間にとって最も大事な心の支えになり、好奇心・向上心を高めようとする精神をはたらかせることを可能とする。音楽を聴いたり、つくったりする時は、日常を忘れさせるような、密度の高い時の流れに身を置くことができる。音楽に込められたメッセージを、境界線をつくらぬ市民全体に届けることを願って、今度も活動を続けていく道を探っていきたい。</p>

<p>今後の課題</p>	<p>1) 小学校との関係作り</p> <p>学校での音楽教育とアウトリーチ活動が、どのように連携していけるのかを話し合う機会、あるいはこうした活動が存在することを広める場を、教育委員会等にはたらきかけてつくることも必要だと考える。そのようにして出前演奏会希望校との交渉を円滑に進めていける体制づくりが必要ではないかと思う。</p> <p>2) アウトリーチに必要な技能開発</p> <p>芸術の高い技術と同時に、芸術的な教育を施すことの両方を兼ね備えたティーチングアーティストの職能を明確に位置づけ、その技能を高めていくことが、今後の音楽文化の広がりを考える上では重要ではないか考える。加えて、大学等の教育機関においても、そのような専門職能を養成していく仕組みを構築することが、必要だと考える。</p> <p>3) 活動資源の調達</p> <p>プロの演奏家をアウトリーチ活動に講師依頼する際には、小学校側から提供される謝礼のみでは充分とはいえず、ボランティアに対応してもらる範囲に活動範囲が限られてしまう。非営利公益的活動にプロの演奏家が、快く参画できるような基盤づくりにも取り組まねばならない。このような努力が、活動の質と継続性を担保し、活動の機能や意味を、受け入れる側に理解してもらうことにつながると考える。同時に、このような努力が、活動をより健全に発展させて、確実に地域に届けていく基盤をつくることになると思う。</p> <p>その意味では、地域ごとに公益的側面を担っている各種セクター、すなわち行政、企業、財団、大学等の教育機関等に、このような活動の意義をよりの確に理解してもらえようはたらきかけていくことも必要かと思う。</p>
--------------	---

説明書【音楽振興部門】

( / )

実施日	学校名・場所	対象学年	プログラム題名
2011. 3. 1	川崎市立古市場小学校体育館（幸区）	全校児童	オペラ「ヘンゼルとグレーテル」鑑賞授業
2011. 3. 22	川崎市立土淵保育園（多摩区）	年長、年中	「音楽で遊ぼう会」
2011. 9. 21, 11. 7, 12. 5	川崎市立橘小学校（高津区）	5、6年生	ミニオペラ「コジ・ファン・トゥッテ」鑑賞会
2011. 9. 26, 10. 24	川崎市立高津小学校音楽室（高津区）	4年生	「木管楽器の音楽に親しもう」
2011. 9. 28, 10. 5	川崎市立宮前平小学校音楽室（宮前区）	4年生	「木管楽器の音楽に親しもう」
2011. 10. 3, 11. 16	川崎市立東生田小学校音楽室（多摩区）	3、4年生	「金管楽器の音楽に親しもう」
2011. 10. 17, 10. 31	川崎市立京町小学校音楽室（川崎区）	4年生	「木管楽器の音楽に親しもう」
2011. 10. 19, 10. 26	川崎市立上丸子小学校音楽室（中原区）	4年生	「木管楽器の音楽に親しもう」
2011. 11. 1, 12. 19	川崎市立上丸子小学校音楽室（中原区）	5年生	「弦楽器の音楽に親しもう」
2011. 11. 14, 11. 21	川崎市立京町小学校音楽室（川崎区）	5年生	「弦楽器の音楽に親しもう」
2011. 12. 7	川崎市立京町小学校音楽室（川崎区）	3年生	「金管楽器の音楽に親しもう」
2012. 1. 25, 2. 3	川崎市立高津小学校音楽室（高津区）	5年生	参加型オペラ教室「魔笛」
2011. 2. 6	川崎市立上丸子小学校音楽室（中原区）	3年生	「金管楽器の音楽に親しもう」
2012. 2. 23, 2. 24, 2. 27	川崎市立古市場小学校体育館（幸区）	全校児童	事前ワークショップと参加型ミニオペラ「魔笛」公演

(注:写真, データ, グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)

様式-10